

英語学概論 1

石川 潔

1 概論文献

è Akmajian, Adrian, Richard A. Demers, Ann K. Farmer, and Robert M. Harnish (1995) *Linguistics: An Introduction to Language and Communication*. 4th ed. Cambridge, MA: MIT Press.

è 石黒ほか (1993) 『現代の英語学』 東京：金星堂.

è 長谷川瑞穂、脇山 怜 (編著) (1992) 『英語総合研究：英語学への招待』 東京：研究社出版.

è 西光義弘 (編) (1997) 『日英語対照による英語学概論』 東京：くろしお出版.

è Widdowson, H. G. (1996) *Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.

è 松本裕治、今井邦彦、田窪行則、橋田浩一、郡司隆男 (1997) 『言語の科学入門 1』 東京：岩波.

è 中島平三、池滋生 (編著) (1994) 『言語学への招待』 東京：大修館.

2 なぜメキシカンと言って通じない？

Mexican: [mɛksikən] (ジーニアス)

様々な発音記号；辞書によって違う

e.g. mɛkˈsi-kən (American Heritage Dictionary)

IPA: make-up ['meɪkʌp] (\$ [mɛɪkʌp])

Ä! speak [spi:k] スピーク, cry [krai] クライ

2.1 なぜ Mexican では「キ」になってしまうのか？

cf. cake 「ケーキ」、make-up 「メイキャップ」

Ä! では、日本語では(日本人は)どうやって「キ」「ク」をききわけてい

るのか？

Ä! 「キ」「ク」は、V も違うが、実は k という C も違う Ä! 調音点が
前か後ろか：「イ」は前、「ウ」は後ろ；同化 = 責任転嫁の論理 :-)

これが「きし」「くし」となると、実は違いは k だけ；V はきこえない

どういう時に「キ」「ク」の後の母音が消えるのか？

！無声音（より正確には無声部分¹）に挟まれると「イ」「ウ」も無声化し、ひいては消えてしまう

ということは、英語の [mèksikən] の k も、調音点が前寄りなのではないか？ Ä! YES; [e] に同化

英語では、前寄りの k と後ろ寄りの k との間の違いが重要でない。しかし、日本語話者はその違いをききわけ、それで「キ」と「ク」とを区別している *本当は違う音

i.e. 彼らがききとれない違いを我々はききわけている（本来ない V を「復元」している）

=> ということは

同じ k でも前寄りと後ろ寄りがあるとかいうけれど、ということは、物理的には2種類の音ということ？

e.g. 「ん」 [N] 千倍 千台 千軒 千円 品位 弾圧
 [m] [n] [ŋ] [e] [æ] [ə]
 (後ろの C に同化) (後ろの V に同化)

e.g. /t/ water ! わら

e.g. 川原先生の話： Ludwig [ç] vs. [k]
 häftig
 ウィーンの地下鉄 [k]

e.g. cars vs. cards 「す」 vs. 「つ」、 「ず」 vs. 「づ」

英語の話：

(1) a. speak

¹e.g. 「です」

b. *sbeak

(2) a. peak† [pʰ]

b. beak † [p]

音的（物理的）には実は (1a) の p は [b]; **opposition** がない

phoneme allophone

[p] や [pʰ] は phoneme /p/ の allophones; 前寄りの k や後ろ寄りの k は phoneme /k/ の allophones.

どういう音素 (phoneme) があって、それにどういう異音 (allophone) があるかは、言語ごとに異なる。

どういう時に /p/ ! [pʰ] ?

stress の位置の表記が **American Heritage Dictionary** や **IPA** で V の上にないのはなぜ？

McDonald strike (1)

ストライク (5)

syllable

onset nucleus coda

なお、書き言葉の **hyphenation** と一致するとは限らない

e.g. sym-boli-cal, mono-chrome, inter-na-tion-al

Ä! syllable の分け方 : **phonotactics**

(3) a. pin

b. spin

syllable-initial の /p/ ! [pʰ]

propose で 2 番目の p も **aspirate** されるから、**prop-ose** でなくて **pro-pose**

同様に

(4) a. top

b. stop

(5) a. A[tʰ]lantic

b. a[tʰ]trocious

[tʰ] is not a possible syllable onset, but [tr] is (Kenstowicz 1994: 251)

(6) a. rhythm

b. rhyth.m

c. rhy.th_tm

(6b): syllabic m

(6c): epenthesis による ə の挿入

[ðm] は possible coda でない

このような場合には

1) V の挿入 (epenthesis)

2) C の削除

の 2 通りの対策が可能 ; この場合には 1)

epenthesis の証拠 : rhythmic

一方、damn の場合には 2);

dam.ŋ

underlying /n/ の証拠 : dam.nation

2.2 で、「メキシカン」は怎么样了？

Mexican: [mɛksikən] (ジーニアス)

[si] を [ji] と発音してしまうのは、日本語の音韻規則 :

/s/ ! [j]/_i

のせい。k の後に母音を入れてしまうのは、日本語の syllable-structure のせい。でも、その一方で、前寄りの k と後ろ寄りの k の違いは英語話者はきき分けられないというのだから、ある意味ではどっちでもいい。では何が悪い？

(7) Most people bridge () gap; you bridge a^{ve}, six gaps.

弱形 vs. 強形: can/can't, a/the

再強勢形 Δ: does, [dʌz] † [dɔz]

schwa (ə) & stress

なぜ U.S.A. を「米国」と言うのか？

「亜米利加」でなくて「米利堅（メリケン）」 (=American) から²

cf. vɛ[]icle ! ve[h]ɛular (unstressed non-initial syllable の h
が消える; Kenstowicz, p. 48)

cf. mem[]ry (ibid.), 'bout

cf. I've, met'm

cf. Tɛnnessɛ / Tɛnnessɛ State (Kenstowicz, p. 48)

cf. Jʌpənɛs / Jʌpənɛs bɔys (ライトハウス)

cf. ふとん [fʊtən] vs. [fʊtɔn]

cf. hʌv to dɔ it [hɔftɔdʊ:t]

cf. リズム！ ラップ@Fulbright Orientation

3 長短その他、応用編（？）

森さん vs. 毛利さん

おばさん vs. おばーさん

[i] vs. [i:]

釣りが趣味です vs. スリが趣味です

(cf. 中島 & 外池 1994: 79{80})

mora vs. syllable

学校	ga.k.ko.o	gak.ko
みかん	mi.ka.n	mi.kan
ロンドン	ro.n.do.n	ron.don
	mora-based	syllable-based

例その1：あだ名

ayako ! aya-tyan

kazuhiko ! kazu-, *kazuhi-, *ka-, kat-tyan

hiroko ! hii-tyan

satiko ! sat-tyan

²高島俊男「お言葉ですが...」週刊文春 8月28日号、1997、pp. 110-111.

例その2：外来語の clipping

ワープロ、パソコン

4 認知科学的捉え方/脳研究とのつながり

音韻規則は、音の解釈規則であり、発音規則。

母語の音韻規則に従って、外国語もききとろうとする。

実は音声的なききわけ能力は退化しない；むしろ、外国語の音のききわけが出来ないのは、母語の音韻規則に従って音声解釈をするため。

日本人の子供は、6～8ヶ月時には l と r のききわけが出来るが、10～12ヶ月時には出来なくなっている (Werker 1995: 92)。しかし、これは耳が悪くなるという話ではなく、母語の干渉 (ibid: 96)。

click のききわけ

左脳障害時に l と r の区別が出来るようになる (英語学会 97 のおみやげ話)。
A! つまり、「耳をよくする」のではなくて、いわば「頭を悪くする」のだ!!

参考文献表

Gleitman, Lila R., and Mark Liberman (eds.) (1995) *An Invitation to Cognitive Science*, vol.1: Language. Cambridge, MA: MIT Press.

Katamba, Francis (1989) *An Introduction to Phonology*. London and New York: Longman.

Kenstowicz, Michael (1994) *Phonology in Generative Grammar*. Cambridge, MA, and Oxford, UK: Blackwell.

Ladefoged, Peter (1993) *A Course in Phonetics*. 3rd ed. Fort Worth: Harcourt Brace College Publishers.

小黒昭一 (1996) 『英語音声の基礎』東京：リーベル出版。

Tsujimura, Natsuko (1996) *An Introduction to Japanese Linguistics*. Cambridge, MA, and Oxford, UK: Blackwell.

Werker, Janet F. (1995) "Exploring Developmental Changes in Cross-language Speech Perception." In Gleitman and Liberman (eds.), pp. 87-106.